There 構文の拡がり

古賀 恵介

1. 英語の主語と There 構文

英語の主語は、統語形式の面からも、意味の面からも一見極めて自明なものに思われる。すなわち、統語的には、平叙文の標準的語順において定形動詞の前に現れる名詞句、疑問文における倒置現象の対象、動詞との一致を引き起こす要素、代名詞の場合主格を取る要素であり、意味的には、動詞が表す事態の第一位的参与者である。しかし、There 構文の there は、統語的には概ね「主語」として振る舞う一方で、意味的には、明確な指示対象を表さないという意味で例外的な存在であり、また、統語的にも、動詞との一致現象に関して単・複の揺れを示すという形でその例外性を露呈している。

本論では、このような There 構文の例外性を、英語の標準的叙述文から外れた特殊構文の一種として説明していく。これは、英語には標準的叙述文のスキーマ（主語＋定形動詞＋その他）に基礎づけられた標準的諸構文の体系が存在する一方で、それと関連する形で例外的な性質を持つ多様な特殊構文が存在し、There 構文もその一種である、という Usage-Based Model に基づく発想である。また同時に、特殊構文の特異性には様々なレベルがあり、それらは何らかの一般的原理から完全に予測できるものではない、という立場を取る。

2. 構文（construction）とは

「構文」とは、一般的には、複数の語で構成された複合的な構造が、その構造全体として一つの特殊な意味と結びついているものを言う（cf. Goldberg 1995, Traugott & Trousedale 2013）。そこでは、個々の語句の意味の合成結果が必ずしも全体構造の意味になるとは限らないし、また以下の例にあるように、その構造の統語的構成（語と語の結びつき方）が、当該言語（ここでは英語）の標準的な統語パターンに則しているとも限らない。

(1) The more you have, the more you want.（the＋比較級構文）

(2) a. No pain, no gain.（ことわざ） b. Easy come, easy go.（ことわざ） c. Long time no see.（挨拶言葉）

ただし、There 構文の場合、まったく何の根拠も無しに標準的統語パターンから逸脱しているのかと言えばそうでもない。There 構文の例外性を基礎づけているのはその情報構造である。つまり、There 構文が例外性を示すのは、英語の標準的な叙述文構造とは違い、特定の情報構造と結びついていることによるものなのである。

3. 英語の叙述文の情報構造と There 構文

文は何らかの情報伝達を行うが、話し手が情報のどの部分を特に伝えたいのか（＝伝達の焦点）という点から 2 つの基本型が存在する（cf. Lambrecht 1994, 2000）。文全体を伝達の焦点とする全焦点構造と、文の一部分のみを伝達の焦点とし、残りの部分は焦点へアクセスするための補助とする部分焦点構造である。

(3) “What happened?” “<u>John went out a few minutes ago</u>.”（全焦点構造： 焦点は文全体）

(4) “Where’s John?” “He <u>went out a few minutes ago</u>.” （部分焦点構造： 焦点は述部）

(5) “When did John go out?” “He went out <u>a few minutes ago</u>.” （部分焦点構造： 焦点は時間句）

(6) “Who went out?” “<u>John</u> did.” （部分焦点構造： 焦点は主語）

上の例にあるように、英語の標準的平叙文のような通常の構文は、情報構造とは一応独立しており、同じ統語構造が異なった複数の情報構造と結びつくことができる。しかしその一方で、分裂文、主題化構文、動詞句前置構文、場所句倒置構文などのように、特定の情報構造と分かちがたく結びついている構文も存在する。

There 構文もそのような特殊構文の一種であり、存在項（存在物を表す名詞句）も含めた存在叙述全体が焦点となっていることを示すために、意味的には主語であるはずの存在項を動詞に後置する形になっている。

(7) <u>There is a book on the table</u>.（存在文： 存在 existence の叙述 --- 存在事態の全体が焦点）

(8) The book is <u>on the table</u>. （所在文： 所在 presence の叙述 --- 存在の場所が焦点）

それに対して、(8)のように、特定の物について「どこにあるか」を述べる所在の叙述においては、存在項は主題として通常の主語位置を占めることになる。

存在項の焦点性（＝非主題性）を明示化するために動詞の後に配置する、という特殊構文は、英語だけでなく、フランス語、イタリア語、スペイン語、ルーマニア語、ポーランド語、ロシア語など多くの言語において見られる（Cruschina 2015, Błaszczak 2018 ほか）。これは、存在事態の叙述というものがその存在項を焦点の一部として必然的に含む、という特殊な性格に起因するものであると考えられる。

4. There 構文の特殊性（例外性）

There 構文は、そもそも特定の情報構造と結びつく形で成立した特殊構文であるため、例外的性質を示す。例えば、主語・動詞の数の一致に関して、英語の標準的な文法規範では存在項との間に一致が起こるが、そこには、種々の要因による“揺れ”が生ずる。（Breivik & Martínez-Insua 2008, Hilton 2016 ほか）

(9) There are more new subdivisions in the south side of town.（are --- 存在項と一致）

(10) There is basically no jobs in the industry.（is --- 存在項と不一致）

(11) There's only two thrift shops down there.（'s --- 存在項と不一致） (以上 Hilton 2016: 61)

また、この構文における there は、明確な指示対象を持たないため一般に「虚辞」（expletive）と呼ばれるが、疑問文における主語・動詞倒置などの統語的操作の可能性からすれば、主語であり名詞句であると言える。しかし、そもそも、このような虚辞の名詞句としての there は There 構文以外には登場しない。

(12) a. That place is expensive. b. *There is expensive.（there は通常の文の主語にはならない）

(13) a. I want to buy that place. b. *I want to buy there.（there は通常の文の目的語にもならない）

つまり、虚辞の名詞句 there は There 構文の一部としてしか使用できないのである。これは there 構文の構文性（言い換えれば、イディオム性 idiomaticity）に基づく性質といってよいであろう。

また、There 構文の there に何か特定の意味があるのか、という問題も議論されることがあるが、少なくとも、明確な指示対象を持つとは言えない。（その一方で、指示対象がないからと言って、何の意味も表さないとも言えないのだが、その点はここでは置いておく。）there の表す内容について俄かには結論を出しがたいが、参考になる事実を少し挙げておく。一つは、英語以外の言語においては、主語位置に虚辞を使う言語もあれば、そうでない言語もあり、虚辞が使われる場合も、その語彙は THERE 相当語より IT 相当語の方が多いと言うことである。（加えて、存在動詞の方も一様ではない。）英語においてさえ、there ではなく it を用いる方言も存在する（Davidse 2017: 105）。また、同じく「存在」を表すイディオム的構文として、反実仮想の仮定節において否定形のみで用いられる IT BE FOR 構文や、未だ非標準的な語法としての IT COME TIME TO 構文がある。

(14) If it were not for your help, he would never succeed.

(15) When it comes time to find new homes for refugees, governments don't always take those in the most danger. (Kjellmer 2001: 334, quoted from the National Public Radio Corpus)

これらの it も明確な指示対象を持たないことは明白であるが、これらの it を何らかの機械的操作で挿入したり、何か抽象的な指示対象（e.g. 抽象的な場）を持つと考えることは、果たして妥当であろうか。それより、全体が一つの固定化された構文として考える方がよほど自然なことのように思われる。

だとすれば、There 構文にしても、同様に例外的な構文の一種と見なすことは、何らおかしなことではなく、ある言語の統語法全体を多様な諸構文の体系的集合体とする考え方から出てくる自然な結論なのである。

主要参考文献

Błaszczak, Joanna (2018) "Clause Structure, Case and Agreement in Polish Existential, Possessive and Locative Sentences: A Phase-Based Account." *Poznań Studies in Contemporary Linguistics* 54, 637-696.

Breivik, Leiv and Ana E. Martínez-Insua (2008) "Grammaticalization, Subjectification and Non-Concord in English Existential Sentences." *English Studies* 89, 351-362.

Cruschina, Silvio (2015) "Patterns of Variation in Existential Constructions." *Isogloss* 1, 33-65.

Davidse, Kristen (2017) "Revisiting the Canonical Existential Clause in English." *Leuven Working Papers in Linguistics* 36, 96-121.

Goldberg, Adele (1995) *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*. University of Chicago Press, Chicago.

Hilton, Katherine (2016) "Nonstandard Agreement in Standard English: The Social Perception of Agreement Variation under Existential *There*." *University of Pennsylvania Working Papers in Linguistics* 22, 61-70.

Kjellmer, Göran (2001) "'It Comes Time': A Look at Existential *It*." *English Studies* 82, 328-335.

Lambrecht, Knud (1994) *Information Structure and Sentence Form: Topic, Focus, and the Mental Representations of Discourse Referents*. Cambridge University Press, Cambridge.

Lambrecht, Knud (2000) "When Subjects Behave Like Objects: An Analysis of the Merging of S and O in Sentence Focus Constructions across Languages." *Studies in Language* 24, 611-682.

Traugott, Elizabeth C. and Graeme Trousdale (2013) *Constructionalization and Constructional Changes*. Oxford University Press, Oxford.